

# 『今昔物語集』卷七第一話の錯誤から

— 標題・本文・評語 —

宮 田 尚

『今昔物語集』七「唐玄宗初供養大般若經語」は、標題の示すとおり、唐の玄宗の時、はじめておこなわれた大般若經の供養のよすを伝えるはなしだ。

玄奘が天竺から持ち帰った大般若經の翻譯が完成したことを祝つて、盛大にとりおこなわれた供養では、經が光を放つてあたりを照らすなどの端祥があらわれ、以来、国はあげて、この經を恭敬するようになったという。

七は卷七の巻頭話であると同時に、卷六から卷七にかけて配置されている諸經靈驗譚の語群にあつて、般若經に関する十二話の靈驗譚の、冒頭をかざる位置にある。

七を讀むについては、このような、集における位置づけに留意する必要がある。卷頭話であることと、般若經靈驗譚の冒頭話であることとの、二重の意味において、『今昔物語集』の宿命を背負わされているとみられるからだ。

ところで、七にはじつは、見過ごすことのできない二点の錯誤がある。それはあるいは、出典の文言の読み違いや、歴史的事実の思い違いによるところの、いわば単純な錯誤なのかもしれない。そ

の可能性がまったくないわけではない。

だが、結論的にいえばこの錯誤は、右のような位置づけと重ねあわせてとらえるのが自然のようだ。かりに単純なものであり、また潜在的なものであるにしても、そこには七の重みが、——正確に言えば、重みをもたせたいとの思いがこめられているようにおもわれる。

1

七にみとめられる錯誤の第一は、大般若經の翻譯を、玄宗の時代だとしている点だ。それが玄宗の時代であつたとの認識は、標題と本文の冒頭と示されている。

・唐玄宗初供養大般若經語（標題）

・今昔、震旦ノ唐玄宗ノ代ニ、玄奘三藏、大般若經ヲ翻譯シ給フ

（本文）

標題は供養を、そして本文は翻譯完了の時期をそれぞれ取り上げているが、供養は翻譯の完了から程をへずしておこなわれているから、時期に関するかぎり、その違いは、ことさらもんだいにするま

でもない。

それにしても、これを玄宗の時代だとするのは誤りだ。

大般若経の翻訳が完成し、供養がとりおこなわれたのは、本文中にもあるように龍朔三年（六六三）だ。これは第三代高宗の時代にあたる。このことはすでに、大系本が指摘している。第八代の玄宗が即位するのは、それからおよそ五十年後のことだ。時間のずれはおおむねよくない。

玄奘は、大般若経の翻訳が完了した翌年に没した。玄宗の生まれる前のことだ。彼と玄宗との間に、時間的な接点はない。大般若経の翻訳を玄宗の時代とするのは、あまりにも不用意で、初歩的な誤りだといわなければならない。

七1への玄宗の登場は、七1にとって不都合なだけでなく、七2との関係にとっても不都合だ。

さきにふれたように七1は、般若経靈驗譚を構成する十二話の一群の、冒頭に位置している。それはいうまでもなく、完訳をみた大般若経の、はじめての供養に関するはなしだからだ。続く七2「唐高宗代、書写大般若経語」は、高宗の命を受けて大般若経を書写した人物が、その功德によって蘇生することができたはなしだ。そこに記されている乾封元年（六六六）という年号からしても、また大般若経という呼称からしても、このとき書写した経は、玄奘らによって翻訳されたばかりのものであったと察せられる。

初供養から書写功德へ。七1と七2とは、時間の経過にしたがって配列されている。これは出典である。『三宝感応要略録』の配列をそのまま継承したもので、とうぜんといえ、しごくとうぜんな

配列だ。逆はありえない。両者は、そういう関係にある。

ところが、とりあげられている時代は七1が七2に先行するのに対して、皇帝に関する部分は第八代から第三代へと、時代の前後が逆になっている。いわゆるねじれ現象だ。

要するに、事実関係からしても、また説話配列の面からしても、玄宗が七1に登場することは、不自然で、無理があるのだ。

七1の出典である『三宝感応要略録』（中42）には、訳経完了の報に接して帝が歓喜したとの記事はあるけれども、その帝が誰であるかについてはふれられていない。編者はその帝を玄宗だと判断して、〈玄宗ノ代〉云々の文言を七1に挿入したわけだが、それにしても、なぜ〈玄宗〉でなければならなかったのか。

この点については、六6「玄奘三蔵、渡天竺伝法帰来語」が参考になる。六6は、つぎのような書き出して始まる。

今昔、震旦三唐ノ玄孫ノ代ニ玄奘法師ト申ス聖人在マシケリ。〈玄孫〉について大系本は、玄宗の誤記だとしたばあいに時代があわないことを考慮し、「第三代の意に取る」ことが許されるならば、該当する皇帝は高宗ということになる」と注している。たしかに、高宗ならば時代はあう。

だが、はなしの主人公の活躍した時代を説明しようとするとき、〈唐ノ玄孫ノ代〉という表現は、いかにもなじまない。〈玄孫〉は本来、時代を説明するに際して用いる語ではない。基点となる人物を示したうえで、その人物との血統上の距離を説明するのに用いる語だ。げんに、六6以外の『今昔物語集』の用例も、そのようになっている。六6の〈玄孫〉は、その配されている文脈からして、玄

宗の誤りだと解した方が無理がないだろう。

七一の錯誤と六六の記事とを重ねあわせるとき、『今昔物語集』の編者にはどうやら、玄奘と玄宗とを結びつけてとらえようとする志向のあったらしいことが浮かびあがってくる。

六六は、玄奘の天竺行を、複数の資料を合成して構成したものだ。現段階で出典に擬せられているとの資料にも、それを玄宗の時代だとする記事はみあたらない。七一のばあいと同じように、もともと出典にはなかったものを、その合成に際して挿入したもののようだ。

## 2

錯誤の第二は、玄奘による大般若経の翻訳の協力者として、寂照と慶賀との名をあげている点だ。原文をあげると、つぎのとおり。

玄奘三蔵、大般若経ヲ翻訳シ給フ。玉花寺ノ都維那ノ沙門、寂照・慶賀等筆受タリ。

「筆受」とは、口授を筆記することだ。つまり、大般若経の翻訳は、玄奘が口頭で訳したものを、寂照や慶賀らが文字化するという方法ですすめられたと、七一は説明しているわけだ。

しかし、これは誤りだ。大般若経の翻訳は、少数の人によってではなく、多人数の専門化による共同作業でおこなわれた。寂照はおそらく、その翻訳者集団に含まれていないであろう。慶賀にいたっては、翻訳にかかわっていないどころか、人名でさえもない。『今昔物語集』は出典を読み違えている。

事実関係の違いもさることながら、順序として、出典の読み違いをまず確認しておきたい。

七一の出典である『三宝感応要略録』(中42)では、右の部分に相当する箇所は、つぎのようになっている。

玉花寺都維那沙門寂照。慶賀翻訳功畢。

『今昔物語集』はこれを、(寂照と慶賀とによって翻訳が完了した)としているのだが、ここは(翻訳の完了したことを寂照は慶賀した)と解すべきところだ。慶賀は人名ではない。

『三宝感応要略録』(中42)はそもそも、「大般若経初供養感応」との標題が示すように、大般若経の初供養のさまを伝えるはなした。翻訳が完了したという結果を前提としてなりたっている。そこには結果があればよいのであつて、過程は問題ではない。翻訳がどのようすすめられたかは、もともと関心の外におかれているのだ。

にもかかわらず『今昔物語集』は、『三宝感応要略録』をふまえながらもそれを踏み越え、翻訳のさまに言及しようとした。その結果、単に翻訳の完了を慶賀したにすぎない寂照を、翻訳に参画した人物、——それも、中心的な役割をはたした人物だと認定してしまつたのだ。

これはおそらく、初供養に関するはなしであることを意識するあまりに犯した、いわば勇み足といふべきだろう。

慶賀を人名だと取り違えたのも、「筆受」との出典にない文言を導入して彼らの役割について説明を試みているのも、同じ発想にもとづく連動した解釈だ。思い込みによるボタンの掛け違いが、七一を出典からかけ離れたものにしてしまったようだ。

慶賀が人名でなく、寂照も翻訳活動に参画していないであろうことは、この間の事情をもっとも詳細に伝える『大唐大慈恩寺三蔵法

師伝(慈恩伝)によつてもたしかめられる。

慶賀についていえば、『慈恩伝』は『三宝感応要略録』とほぼ同じく、

玉花寺都維那寂照。慶賀功畢設齋供養。

としている。初供養は翻訳の完了を慶賀して、寂照が経営したというのだ。

寂照については、大般若経の翻訳された前後の状況をみる必要がある。『慈恩伝』によれば、その間の事情は、あらましつぎのとおりであつたという。

般若経にはすでに、鳩摩羅什の訳したものがあつた。だが、惜しむらくは、それは抄訳だつた。そこで人々は、玄奘に完訳を要請した。玄奘も般若経の翻訳には積極的な意欲を示し、帝の許しをえて都を離れ、玉華宮(玉花寺)に移つた。都にいたのでは雑用にかまけて、存命中の成就はおぼつかないと考えたからだ(衆人更請委翻。然般若部大。京師多務又人命無常恐難得了。即請就於玉華宮翻訳。帝許焉)。

玄奘は、玉華宮に「翻経大徳及門徒等」を引き具して行つた。同行した「翻経大徳」とは、玄奘が西明寺に在住した当時、勅命によつて選任された五十人の大徳のことであろう。彼らには、それぞれ一人ずつの侍者がついていた。ほかに一五〇人の童子や、あらたに得度した十人の弟子たちも、翻訳活動の協力者として選任されていた。翻訳は、顕徳五年(六八〇)正月一日からはじめられた。般若経が大部であることもあつて、作業は難渋し、翻訳にあつた学徒は、経の一部を割愛するように求めた。玄奘も彼らの意見を入れ、一時

は、抄訳やむなしとの方向に傾きかけた(経梵総有二十萬頌。文既広大。学徒每請刪略。法師將傾衆意。如羅什所翻。除繁去重。作此念已)。

だが、けつきよく四年近い歳月をかけて、龍朔三年(六六三)十月、所期の目的どおり、般若経の翻訳をなしたとげた。六百巻におよぶ新訳は、「大般若経」と称することになった。大事業の完成を祝つて玉花寺では、さつそく供養が開かれた。

要するに、『慈恩伝』によれば大般若経の翻訳は、七一に示されているように、玄奘の口授を筆記したものではなかつた。口授による部分があつたとしても、それはあくまでも、一部にすぎないだろう。翻訳は原則的には、「大徳」「翻訳大徳」、あるいは「学徒」とよばれているところの、専門家集団の共同作業ですすめられた。だからこそ彼らは、玄奘に対して、翻訳困難な個所の「刪略」を求めましたのだ。また玄奘も、彼らの協力なしに翻訳は成し遂げられないことを知つていたから、いっそうの努力を要請している(経部甚大每懼不終。努力人加勤懇勿辞劳苦)。

玄奘を助けた専門家集団は、玉花寺とはかかわりなく、すでに選ばれていた。玉花寺は、彼らが翻訳活動に専念できる場として設定されたにすぎない。玉花寺に期待されているのは、翻訳要員の提供などではなく、翻訳環境の整備、維持なのだ。

寂照は、玉花寺の都維那、すなわち寺務担当者として、玄奘らの翻訳活動を側面から支える立場にはあつた。けれども、それに直接参画する立場にはなかつた。そうみるのが自然だろう。

七1にみとめられる右の二点の錯誤は、根を同じうする。翻訳のおこなわれた時代を玄宗の治世だとした第一の錯誤も、大般若経の翻訳を寂照、慶賀らの筆受によるとした第二の錯誤も、ともに出典の不備不足を補おうとしたところより発したものだ。

もつとも、出典の不備不足というのは、あくまでも『今昔物語集』の側からのとらえ方だ。『三宝感応要略録』(中42)それ自体に、ならんかの不都合があるわけではない。

ただ、それを取り込んで自前の世界を構築しようとするについては、供養の際に顕現した瑞祥だけでは不十分だとの判断が、『今昔物語集』には、はたらいなのだ。般若経靈驗譚の話群の冒頭にすえるためには、史的展開のひとこまとして位置づけうる条件がほしい。その条件を満たすことができれば、形も整い、はなしとしての安定性も増す。それはまた、当該話の権威化にもつながる。編者はおそらく、こう考えた。

そこで翻訳の時期については、出典のない〈玄宗ノ代〉を補うとともに、翻訳者と翻訳の様態については、出典の記事をおおはばにふくらませた。

結果として、こうした措置は裏目に出た。出典の文言の読み違いや事実誤認などという、弁明のしようのない錯誤を呼び込んでしまった。

しかし、結果はともあれ、錯誤の背景は、およそこのようなしだ

いであつたらう。

ところで、出典の補足と同義語である七1の強化補強は、いまいうように史的展開のひとこまとして位置づけようとの目的をもつものであるが、さらにいえばそれは、標題に示された〈初〉を強調せんとするものだ。

事実、七1に〈初〉は不可欠だ。はじめておこなわれた供養に関するはなしであるがゆえに、七1は七1でありえた。〈初〉を欠いた七1など、存在理由がない。

そもそも、『三宝感応要略録』(中42)を七1の出典として採用したのも、それが標題に「大般若経最初供養感応」と、〈最初〉の語をかかげていたからだ。そこでとりあげられている供養が、大般若経のはじめての供養であることを示す語は、標題の〈最初〉だけだ。本文中にはない。供養のおこなわれたのが龍朔三年との記事が本文中にあり、調べればこれは、翻訳完了直後のことだとわかるけれども、『今昔物語集』に調べた形跡はない。

さて、標題の〈最初〉を手がかりとして『三宝感応要略録』(中42)を出典として採用した七1は、「唐玄宗初供養大般若経語」と、『三宝感応要略録』(中42)の標題をほとんどそのままのかたちで転用した。同時に、話末の評語でも「此レ、大般若経ヲ供養シ奉ル初メ也」と、念押しをしている。標題と評語とへのこうした重出現象は、〈初〉にこめた期待の強さのあらわれにほかなるまい。

ここで、ひとつの事実を確認しておきたい。標題と評語には〈初〉があるけれども、『三宝感応要略録』(中42)の場合と同様、じつは、七1の本文中にはそれはないのだ。

つまり、七一にあつては、一話の核となる肝心な部分を本文は欠いており、それを標題と評語とで補っているということになる。

標題、本文、評語の三者がそれぞれ役割をもち、機能を分担しあっていることを示すこうした補充の構造は、七一にとって、存立にかかわる重要な意味をもつ。

同時にこのことは、『今昔物語集』の各話が原則として標題、本文、評語の三部門からなりたつものである以上、七一だけにとじまらず、全巻に適用される可能性があることを示唆する。

#### 4

一部に例外はあるけれども、『今昔物語集』の各話は、標題、本文、評語の三部門で構成されるのを基本とする。これは『今昔物語集』の、きわだった特色だ。

したがって『今昔物語集』を理解しようとするについては、三部門を総合して読む必要がある。三部門を総合することによつてはじめて、編者の意図するところが理解されるはずなのだ。

しかし、考えてみれば不思議なことだが、『今昔物語集』はこれまで、そのような読まれかたをしたことはなかった。各部門が個別に考察されたり、標題と本文、あるいは本文と評語といったかたちで二部門の関連が検討されたことはあるけれども、三部門が総合して考察されたことはなかった。これは『今昔物語集』にとって、不幸なことであつた。

とりわけ『今昔物語集』にとつて不幸だったのは、標題をとおしめての考察が手薄だったことだ。標題はなによりも、編者の読みをあ

らわす。そして第二に、その読みにもとづいて、読者の読みを方向づけようとする目的と機能とをもつ。とうぜんそこには、作品形成のための、集合の論理がはたらく。標題には、編者の『今昔物語集』にかける思いが、もつとも直截に示されているのだ。

それゆえ、『今昔物語集』を理解するにあつてまずまずすべきことは、標題を視座として、編者の読みや、作品形成へのもくろみに耳を傾けることでなければならぬ。評価や論評は、しかる後になされるべきであらう。標題に示された編者の読みや編集のねらいを顧慮することなしに加えられた評価は、ややもすれば客観性を欠き、『今昔物語集』の実態とかけ離れたものになりかねない。

七一に戻つて、そこでの標題、本文、評語の機能、あるいは役割分担などに、いま少しふれておきたい。

まず本文は、『三宝感応要略録』（中42）を受け、基本的にはそれにしたがっている。一部に、供養で顕現した瑞祥に対する参列者の反応を説明する「皇帝ヨリ始メ大臣・百官、皆此レヲ見テ歡喜シテ、各希有也ト思フ」のような、出典にない記述が補われているが、これは供養の主催者を皇帝だとする設定をふまえたうえでの、拡大解釈であり、権威づけのひとつであらう。こうした（はみ出し）はあるものの、本文は『三宝感応要略録』（中42）の枠組みの中に、おおむねおさまっているといつてよい。

標題は、供養の歴史的な意図を明確にしたうえで、このはなしを七一に定位させることの必然性を主張しようように仕組まれている。時代をさし示す（唐玄宗）の挿入も、そのための措置であつた。標題には、作品形成のための集合の論理が色濃く出ている。

一般論としていえば、出典の枠組みの中で、改変をなるべく小規模なものにおさへながら、はなしに説得力をもたせようとしているのが本文だ。目はつねに内側に向いている。それに対して標題の目は、はなしの外に向けられている。視線の先にあるのは、『今昔物語集』の組織だ。

標題は本来、本文に協力して、その力を引き出すはたらきをするはずののだらう。しかし、現実にはしばしば、本文と志向するところに微妙な違いのある例がみられる。ときには、本文を置き去りにした標題さえもある。これらの点については、すでに指摘したとおりだ（『今昔物語集震旦部考』十六章）。

七一の標題と本文との関係も、『今昔物語集』の一般的傾向と、ほぼ同じであらう。標題は本文を助け、その欠を補っているのだが、それはただ単に、本文に協力しているのではない。標題としての目的意識、あるいは主張をもつたうえでの協力関係なのだ。むしろ、標題が主導しているといつてもよい。

さて七一の評語は、志向するところの微妙に違う標題と本文とをふまえて、それらを調整し、調和をはかるとともに、本文の趣旨の徹底と、増幅とをはかっている。具体的にみよう。

此レ、大般若経ヲ供養シ奉ル初メ也。其後、国挙テ此ノ経ヲ恭敬供養シ、受持、読誦シ奉ル、必ズ靈驗掲焉ナル事多シテ干今不絶ストナム語り伝ヘタルトヤ。

二文からなる評語のうち、第一の文は標題を受けており、続く第二の文は、本文を受けている。標題を受けている第一の文については、あらためていうまでもあるまい。

『今昔物語集』巻七第一話の錯誤から — 標題・本文・評語 —

供養で顕現した瑞祥の波及効果もあって、その後、大般若経は国中でひろく恭敬されたという第二の文は、本文中にみえる玄契の、次のセリフを受けたものだ。

経ニ説クガ如シ、「四方ニ大乘ヲ願ハム者有テ、国王・大臣・四部ノ徒衆、此ノ経ヲ書写シ誦持シ読誦シ流布セム、皆、天ニ生ズル事得テ究竟解脱セムト」既ニ此ノ文有リ、不可滅失ズ。瑞祥を目のあたりにした玄契が、大般若経の靈驗あらたかなことを確信し、書写、誦持、読誦等をするならば、解脱の境地に達すること間違いなし、と説いているわけだが、この時点ではあくまでも、将来にかかわることだ。予言である。

しかし、本文中のこの発言を評語で反復することによって、予言は予言で終わらず、実体をもつことになる。巧妙な意匠替えだ。予言に実体をもたせることは、とうぜん、七一を史的展開のひとつこまとして定位させようとする標題の趣旨を生かすことを意味する。

要するに、評語もまた、標題で示された集合の論理に、しっかりと組み込まれているのだ。

## 5

評語と本文とのかかわりあいについては、すでに森正人氏の論がある。

「説話と評語の不整合」（『国語と国文学』76・11）、「類聚と表現の相剋」（『国語と国文学』77・11。いずれも、標題の一部を変更して『今昔物語集の生成』に収録）など、評語に視点をすえた一連の

論文において森正人氏は、本文との整合性を欠く評語の分析をとおして、『今昔物語集』生成の原理を追求している。

森論の新鮮さは、評語を、本文とのかかわりにおいてとらえている点にある。それまでに試みられていた評語への考察は、評語を本文から切り離して、いわば無機的に、編者の思想を帰納しようとするものであった。森正人氏はこうした方法を批判し、「問うべきことは評語の内容でなく、どのように評語が語られているかでなければならぬ」と主張した。

これは当をえた主張であった。評語に編者の思想が込められているとしても、それはとうぜん本文の束縛を受ける。本文の桎梏から解放された、自由で独立した評語などありえない。

ただし、森論には残念ながら、標題への配慮が欠落している。評語と本文とのかかわりを論じようとするとき、まず問われなければならないのは、いうまでもなく、本文の志向するところだ。すべては、ここから出発する。

本文の読みは、このばあい、論者の感性や美意識にゆだねられるべきではない。読みの基点は、あくまでも編者のそれにおかなければならない。評語はほかでもなく、編者が自らの読みに対して付したものだからだ。

編者の読みは、すでにふれたように標題に示されている。つまり、標題をとおして読むことが、評語への考察にとつても不可欠なのだ。

標題に示された編者の読みが、つねに適正だというわけではもちろんない。なかには、あきらかに妥当性を欠くとみられるものもある。しかし、そうしたものでさえ、まずは編者の目の位置から眺め

ることが必要なのだ。

さて、標題をとおして読むとき、本文との整合性を欠く評語は、きわめて限られてくる。大部分の評語は整合性を欠くどころか、むしろ標題に示された集合の論理に、しっかりと組み込まれていることが知られる。森正人氏が不整合の例としてあげている評語のうちから、震旦部の九17・18の両話について、以下、具体的にみていこう。

両話にはそれぞれ、つぎのような標題が付されている。

九17 震旦隋代人、得母成馬泣悲語

九18 震旦韋慶植、殺女子成羊泣悲語

標題の示すところによれば、両話の主人公は〈隋代人〉であり、〈韋慶植〉である。これ以外の解釈の入る余地はない。

つまり編者は、彼らが馬、あるいは羊に転生した肉親に呵責を加え、後で事情を知って泣き悲しむはなしだと両話を読み、読者にもまた、そのように読ませようとしているのだ。このとき、両話は内容上一類をなすとの判断があり、その判断にもとづいて、標題の形式も意識的にあわせ整えたに違いない。編者の意思が、このあたりには濃厚に示されている。

九18の類話である『宇治拾遺物語』一六七話も、「ある唐人、女の羊に生たる知らずして殺す事」と、父親の側からとらえた標題を付している。『今昔物語集』型の解釈には、一定の広がりがあったということになるか。

しかし、かりにそうだとしても、『今昔物語集』や『宇治拾遺物語』にみられるこの解釈は、じつは、本来のものではない。

両話は元来、畜生に転生した母、あるいは娘を主人公とする話であつた。

両話の源流であり、『今昔物語集』が直接依拠している『冥報記』には標題が付されていないけれども、善悪をあきらかにして将来を戒めるために報を説こうとしたという『冥報記』の編纂目的に照らしてみると、彼女らが主人公であることはあきらかだ。

彼女らには、報を受ける因があつた。九七の母は、子の米を盗用した。九八の娘は、親の財を盗用した。そのために彼女らは畜生に転生したのであり、加えて、盗んだ相手である子、あるいは父から呵責を受けるという、二重の苦しみを負わされたのだ。

それにひきかえ、母の生まれかわりである馬を、それと知らずに打ちすえた子にも、娘の生まれかわりである羊を、それと知らずに殺して客をもてなそうとした父にも、責めを負わなければならぬ。直接の因はない。彼女らは、結果として、そのような無過失の肉親に対してさえも、苦しみをあたえてしまつてゐる。

報のきびしさを説こうとする『冥報記』の目的は、その期待するとおりに継承されている。つぎのような事例は、彼女らを主人公とするとの解釈が、時間と空間を越えた広がりをもつていたことを示している。

九七についていえば、『冥報記』を引用した『法苑珠林』には標題は付されていないけれども、類話の収められている箇所が「債負篇」であることよつて、『法苑珠林』がどのように受け止めてゐるかはあきらかだ。このはなしに、「債」を（負）うべき人物は、母のほかには登場しない。

このほか、標題の付されているものは、次のように、いずれも母を主役としてかかっている。

隋朝王氏女驢生事（三國伝記）

驢馬称亡母形事（金言類聚抄）

大業中一母（善惡現験報応篇）

九八についても、事情はほぼ同じだ。『法苑珠林』では、「十惡篇・偷盜部」に類話が収められているし、『太平広記』でも「宿業畜生」の項に収められている。また、『善惡現験報応篇』は「現報惡報・偷盜」の項に収めただうえて、「韋慶植女」との標題を付している。やはり、類話を収めている文献は、いずれも韋慶植ではなく、彼の娘が主役だとの立場にたつてゐる。

ところが『今昔物語集』は、こうした伝統的、かつ正当な解釈と一線を画し、主人公を変更するという方法で、主題を読みかえてゐるのだ。

たとえば九八において、主人公を韋慶植の娘から韋慶植本人に変更したとき、主題である答の内容は、当然（盗み）から（調理を急がせたこと）に移行する。

『今昔物語集』がこのような方法で読みかえたのは、九七・一八だけではない。評語と本文との不整合の例として森正人氏があげてゐるものなかにも、ほかにたとえば、十二五がある。ここでは主人公が、息子から母に置かえられている。

こうした読みかえは、いずれも、編成上の要請にもとづくところの、すぐれて意図的な営為であり、『今昔物語集』理解の根幹にかわる重要な意味をもつ。これを見過ごすわけにはいくまい。

行させたとき、

・此レヲ以テ思フニ、人ノ許ニ有ラム牛・馬・犬・鶏等、皆、前世ノ償フ所有テ来レル也ト疑テ、強ニ呵嘖ヲ不可加ザル也トナム語リ伝ヘタルトヤ（九一七）。

・此レヲ以テ思フニ、飲食ニ依テノ咎也。然レバ、飲食ハ、少シ持隠シテ調ヘ可備キ也、心ニ任セテ、迷ヒ調ヘ不可備ズトナム語リ伝ヘタルトヤ（九一八）。

のとき評語は、本文との整合性を欠くところか、標題で示された本文の趣旨にのっとり、あらたに付与した意味づけを補強するものであることが知られる。

他の例についても、事情は大同小異だ。標題は集合の論理を優先するのに対して、評語は標題に対してよりも、やや本文に重きをおくというふうには、両者には性格の違いがあり、常に首尾一貫するというわけにはいかなければ、評語はおおむね、標題の志向するところに添っている。

\*

\*

七一にみとめられる錯誤には、背伸びした『今昔物語集』の、願望と限界とのないまぜになつた実態が、あからさまに露呈しているといつてよいだろう。それは『今昔物語集』にとつて、望ましい現実ではないけれど、けつして特殊ではなかつた。